

令和7年4月
一橋大学

令和7年度一橋大学学校推薦型選抜第2次試験

出題の意図等 【小論文】

商学部

本出題では、個人が特定の事柄に集中している状態であるフロー経験を取り上げた。フロー経験は個人の労働や消費活動に関連する心理状態であり、商学部で扱う現象と関係が深い概念である。3つの設問を通して読解力や論理的思考力、抽象化能力、表現力などを評価することを意図している。

設問(1)：課題文該当箇所に関する論旨を適切に把握できているか、また、簡潔に要約できているかを問う問題。

解答例：フロー経験とは、個人がある目標に対して取り組んでいる時に、それを阻害するような情報が遮断され、他の事柄に意識を向ける必要がない状態において、すべての意識が自由に個人の目標達成のために使われている状態。

設問(2)：課題文該当箇所に関する論旨を適切に把握できているか、また、自己の成長につながる心理的なメカニズムが詳細に理解できているかを問う問題。

解答例：自己の成長は自己の構成が複雑になることを指し、差異化と統合化という二つの心理学的過程に対して等しく注意を向けた結果として生じる。差異化とは他者から自己を区別すること、統合化とは他者や自己を超えた思想との結合をそれぞれ示している。フロー経験によって自己の目標が達成されると、他者よりも傑出した能力を獲得したという気持ちを得ることで、差異化が実現される。同時に、フロー経験は内的にだけでなく、他者や周囲の世界との一体感を醸成する。このフロー経験は楽しさを伴い、それを再度経験するために努力をするため、成長が継続する。

設問(3) 課題文全体に対する理解にもとづいて、具体的な現象の説明から抽象的な概念を理解し説明することができるかを問う問題。

解答例：生活の質を改善し、幸福を得るための方法は、後述する二つの戦略の両方を組み合わせることである。第一の戦略は、自己の目標に対して環境条件を変化させることであり、具体的には富や地位、権力といった象徴を手に入れることで自身を取り巻く環境を変化させ、快樂、すなわち身体的欲求や期待を満たすことによって幸福を得ることである。しかし、この戦略は幸運と外部環境の協力といった偶然性に依拠し、それによって得られた快樂は持続せず、自己の成長を促さない。一方、第二の戦略は、周囲の環境や自分に起きることについて、経験の質を意識的に統制することであり、それによって楽しさ、すなわち事前の期待を

超え、予期しなかったことを達成した時に生じる感覚を経験することで幸福を得ることである。この楽しさを生活に組み込むことで、自己の成長を達成することができる。第一の戦略による快楽は、それ自体では幸福につながらないものの、第二の戦略による楽しさの追求の前提として必要となる。

経済学部

為替レートは国際経済における重要な指標であり、輸出入の競争力、資本移動、金融政策の運営などに影響を及ぼす、経済政策にとって極めて重要な要素である。特に近年の円安は、頻繁に経済ニュースで取り上げられており、関心の高いテーマとなっている。そのような為替レートだが、(課題文で説明されている通り) 経済学では主に2つの決め方が提示されている。本問題は、要約を通じて文章理解力や表現力を評価しつつ、その他の設問を通じて経済現象を論理的に理解・説明できる能力を評価することを目的として出題した。

問1

購買力平価説と金利平価説の理解を問う設問である。いずれも文中に詳しい説明があるため、文章に即して要点を的確に説明できればよい。

問2

ビッグマックは必ずしも貿易財とはいえないため、一物一価が成り立たないことを指摘できればよい。

問3

実質実効為替レートでは優位に立っているにも関わらず、貿易収支が赤字になるほど、日本の産業の輸出競争力が落ちているというのは、一つの答え(バラッサ・サムエルソンの考え方)。その関連で、日本は海外直接投資を増やして、海外拠点から輸出しているという答えも可。また、近年のコモディティ価格上昇の影響で輸入が急増したことを指摘してもよい。

問4

日米の金融政策の方向性を踏まえて、金利格差がどうなりそうかを類推し、円ドルレートの先行きを考察できていればよい。

法学部

本出題では、ベーシック・インカムについてその社会保障政策としての是非を論じた論説を題材とし、法学・社会科学を学習するにあたっての前提となるべき、社会に関する基本的知識と文章理解力・論理的思考力・表現力とを評価することを狙いとした。

設問 (1) :

本問では、主として基本的知識と文章理解力を評価することを狙いとした。現行の社会保障制度について著者が指摘する「2つの脆弱性」の中身を踏まえ、著者がベーシック・インカム制度の特徴として挙げる諸点、また著者が指摘するその長所が、この「2つの脆弱性」をどのように解決するかを説明することを求めたものである。

設問 (2) :

本問では、上述の諸能力を総合的に評価することを狙いとした。すなわち、前問で問われた課題文の理解を前提としつつ、ベーシック・インカムについて著者が挙げる長所と短所について、著者が課題文末尾で指摘する通り、ある事象の蓋然性に関する経験的評価と、その事象の関連性に関する価値評価の、それぞれの観点から批判的検討を行うことを求めたものである。たとえば、勤労意欲の減退について、人は現在でも生存のためにのみ勤労しているわけではなく、ベーシック・インカム制度が実現した社会であっても自発的労働が大きく減少するようには思われないことを指摘したり（経験的評価の問題）、フリーライダーの問題について、それが不公正であるという批判者は生存権保障が当人の責任の有無に条件付けられるのは当然だということを前提としており、生存権を無条件的に保障しようとするベーシック・インカム支持者に対する論点先取を犯していると指摘したりする（価値評価の問題）、などが考えられよう。

社会学部

日常生活の多くの場面において、努力の重要性が強調されています。たとえば、学校の先生がテストの答案を返却するときに、高得点者に対して「よく頑張った」と努力を褒め、低得点者に対して「もう少し頑張れ」と努力を求めることは、努力すれば成績があがるという努力重視の考え方を反映しています。このように、先天的な能力よりも、努力を重視し、努力すれば成績があがると考えることは、得点が悪かった際にもあきらめずに勉強をするように生徒を動機づける効果があると考えられます。また別の側面として、スポーツの監督が選手を評価する際に、試合の結果よりも、普段の練習での努力を重視して、評価することがあります。運などの要素にも左右される短期的な結果よりも、日々の努力を重視することで、長期的な視点から選手を評価できるメリットがあるといえるでしょう。

その反面、努力を重視することには弊害も考えられます。たとえば、学力を決めるのは努力だけではなく、家庭環境や先天的な能力などの要因も関わっています。家庭環境の要因などで困難を抱えているために成績が悪い生徒に対して、努力を重視することは、その生徒の「努力が足りない」と見当違いの批判をすることにつながる危険性もあります。また、家庭環境や先天的な能力に恵まれて成績が良い生徒にとって、努力を重視することは、高い成績を自らの努力のお陰だと過剰に見積もることになる可能性があります。くわえて、スポーツの場面などにおいて、努力が重視されすぎた結果、努力すること自体が目的になり、練習時間が必要以上に長くなるものの、それが試合での結果に結びつかないということも起きることがあります。これらは努力を重視することのデメリットであるといえます。

本設問は、具体的事例を用いて、以上に例示したような「努力を重視すること」のメリットとデメリットをバランスよくとらえる洞察力、それを分析する思考力、思考を整理し論理的に提示する文章力を評定することを意図しています。

ソーシャル・データサイエンス学部

出題の意図：

この設問では、最初に具体的な実験の内容が説明されている。それは以下の通りである。

- 1) 被験者に関する情報。
- 2) 実験のセッティング：被験者を3つの異なる実験にランダムに分けたこと、そして実験1,2ではグループの構成員は上位、下位の両カースト出身者を含むが、実験3ではグループの構成員は全員同じカーストに属する。
- 3) 実験1ではグループの構成員のカーストは被験者に知らされていないが、実験2と3では知らされている。

補足事項

実験の結果は問題文に図(Figure 1)として記載されている。著作権の関係で図は掲載できないために、以下に出典を示す。

(出典：Hoff, K., & Pandey, P. (2006). Discrimination, social identity, and durable inequalities. *American economic review*, 96(2), 206-211.)

ソーシャル・データサイエンス学部では、大まかにいうと、社会科学（ソーシャル）、データ、そしてサイエンス（統計学、特に実験、擬似実験等の方法論）の3つの知識を学び、それを組み合わせて研究を行うことを学ぶ。この入試問題は、そのような学部で学ぶための適性があるかを問う。以下、この問題によって評価する知識、能力を説明する。

1. 社会科学に関する知識、洞察：カースト制度による階級差別に関する知識、そして差別等の社会問題に関する問題意識の深さを問う。インドは過去にカースト制度という身分制度があり、その制度では人々は大まかに4つの身分（カースト）に分かれていた。その4つのカーストは
 - 1) ブラーマン：この身分が最も地位が高い階層である。司祭階層とも呼ばれる。
 - 2) クシャトリア：この身分は2番目に地位が高い階層である。
 - 3) バイシャ：この身分は3番目に地位が高い階層である。
 - 4) シュードラ：この身分は最も地位が低い階層である。これらの4つの身分以外に、賤民（アンタッチャブル）と言われる最下層の人々がいる。

現在ではカーストに基づく差別は政府によって禁止されているが、差別は実際には存続している。この論文では、なぜ、インドのケースのように公的に禁止された差別が長期にわたって存続し続けるのかを分析している。その重要な理由のひとつとして、この論文では、差別は、それが仮に公的に撤廃されても、人々の内面に存続し続けることを、実験を通じて実証的に示している。

2. 実験、擬似実験の方法論に関する基本的な理解：実験の細かいセッティングを正確に理解し、そのような実験によって研究者が何を計測したいかを正しく把握できるかどうかを問う。

より具体的には、実験1と実験2のグループは、カーストが上位、下位である被験者を両方含む。また、実験1ではグループの構成員のカーストは被験者に知らされていないが、実験2では知らされている。違いはそれだけであるが、実験2で同じグループの被験者がお互いのカーストを知らされた時、上位、下位カーストのそれぞれのメンバーが、それぞれの内面化されたカーストに沿った行動をとる。そして同じグループの被験者がお互いのカーストを知らされなかった場合は、それぞれのカーストのメンバーは、そのような立場にとった規範に縛られずに行動することから違いが生じる可能性が生じることが考えられる。

3. 基本的な統計学：実験結果を統計的に正しく解釈できるかを問う。

この実験の中で最も特徴的な結果は、実験1と実験2の間の結果の違いである。カーストの身分が知らされていない実験1では、上位カーストと下位カーストのメンバーのパフォーマンスはほぼ同じであり、一人当たりの正解数は平均6である。他方、実験2では、被験者のカーストの身分が同じグループ内で知らされており、その場合は上位カーストの一人当たりの正解数の平均は6よりも高く、実験1より若干高い。その反面、下位カーストの平均正解数は4を若干超える程度であるので、実験1よりもかなり低い。さらに、実験3では、上位カーストと下位カーストの被験者は同じグループには属しないが、その場合は、両カーストともに低いパフォーマンスを示す。

以上の3つの点を理解して初めて、この実験が示していることは、カースト制度による差別は差別された被験者の内面をも損なうことを理解し、そのような説明をすることが可能となる。以下、解答例を示す。

解答例：

インドでは過去にカースト制度という身分制度があり、その下では人々は大まかに4つの身分（カースト）に分かれていた。またそれ以外に、最下層のアンタッチャブルの身分もあった。この研究では、構成員のカーストが異なるさまざまなグループを実験的に形成し、その中で被験者のパフォーマンスを計測することによって、カースト制度による身分差別の影響を実証的に分析している。

より具体的には、実験1と実験2ではそれぞれのグループの構成員はカーストでの上位、下位に属する被験者を含む。実験1ではグループの構成員のカーストは被験者に知らされていないが、実験2ではグループ全員に知らされている。実験3では上位、下位の両カーストは別々のグループに属しており、全てのグループでは被験者のカーストを知らされている。

問題文の図では、被験者一人ひとりに15の課題を解くように指示された。その結果が図に示されている。

この実験の中では、実験1と実験2の結果の違いが最も特徴的である。より具体的には、被験者のカーストが知らされていない実験1では、上位カーストと下位カーストのパフォーマンスはほぼ同じであり、一人当たりの正解数の平均は6である。他方、実験2では、被験者のカーストがグループ内で知らされており、その場合は上位カーストの一人当たりの正解数の平均は6よりも高く、実験1より若干高い。その反面、下位カーストの平均正解数は4を若干超える程度であるので、実験1よりもかなり低くなっている。さらに、実験3では、上位カーストと下位カーストの被験者は同じグループには属さないが、その場合は、両カーストともに低いパフォーマンスを示す。

このような結果が生じた理由を考察する際に重要なことは以下の2点である。第1に、実験では、被験者はランダムにそれぞれのグループに配属されていることである。よって、同じカーストであれば、グループ間の平均的な能力の差異はほとんど無いように設定されていることである。第2に、実験を行う際に、カーストごとに異なる指示は与えられなかったことである。つまり、実験では、被験者にはカーストによる差別的処置は何も加えられず、自由に問題を解くことができたことである。よって、カー

スト間でパフォーマンスに差が生じる理由は、カースト間で能力の差があるか、またはエリート意識や劣等意識等の内面化されたカースト意識によるものであると考えることができる。

従って、カーストの身分が知らされていない実験1において、異なるカーストの間でパフォーマンスの違いがほとんどなかったことは、カーストの間の平均能力の違いはないことがわかる。そのように考えると、実験2で上位カーストと下位カーストの間で大きなパフォーマンスの違いが生じた原因は、実験1と2の唯一の間の唯一の違いである、実験1では被験者のカーストは知らされていないが、実験2ではグループ内で知らされていることによるものである。よって、明確な差別が制度的に存在しなくても、カーストの身分が周りに知らされると、被験者は内面化されたカーストの身分に応じた規範に沿って行動してしまうとの結論が得られる。

この実験が示すことは、長年続いた身分、性別、人種等による差別は、たとえそのような制度が撤廃された後も、人々の意識に深く内面化され、一度自分と他者との身分、性別、人種等の違いが顕在化するような状況に直面すると、そのような意識が喚起され、人々は「分相応」に行動してしまうことである。それが、差別は仮に制度的に撤廃されても、その後長い間存続し続ける理由となる。